

シンポジウム（令和元〔2019〕年11月9日）

## 神と狩りと肉喰

段上達雄

（本学文学部 史学・文化財学科／本学大学院文学研究科文化財学専攻教授）

### （1）猟法

#### 1) 狩猟対象と主要利用法

猪＝食肉。肉は脂分が多く旨味がある、

鹿＝武具等に鹿革は必需品。肉は脂身が少ない。

熊＝皮と肉、熊の胆(胃腸薬)

その他の獣(兎・狸・狐・穴熊・カモシカ)＝皮と食肉

鳥類＝雉・山鳥・土鳩・雀・鴨・ガン＝食肉

#### 2) 猪猟

勢子と犬による追い込み猟。（臼杵市野津町の場合）

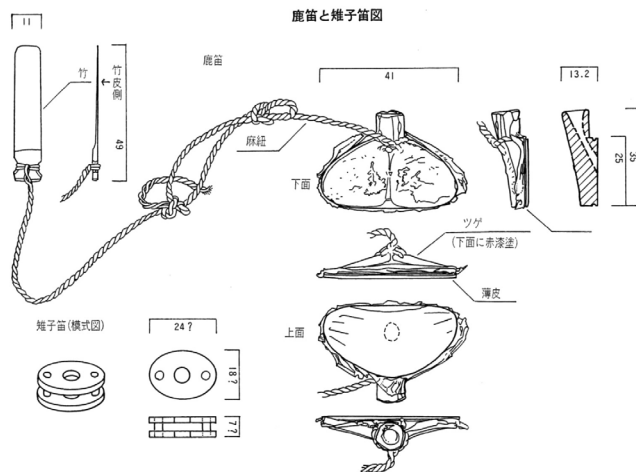
a. 猪狩りには猟師が最低でも7～8人必要で、多い時には17～18人になることもある。猟師のうち、セコ（勢子）は一人で、その他の人は矢待ちといって猪を待ち伏せする。矢待ちの適地は、上り坂のウジ（獣道）の猪を撃てる場所で、的を外した銃弾が地面にチチコム（撃ち込む）所である。勢子は10年以上の経験をもち、山を良く知っている元気な人になる。猟師は裾からげの着物に袴纏を着てパッチを穿き、足半を履いて頬被りをした。猟師は日ごろ1～2頭の猟犬を飼っている。猟の時に持ち寄ると15～16頭になる。一人の勢子がすべての犬を連れて行く。

b. ひとつの猟場を狩りすることをヒトカケという単位で表す。昔はトランシーバーや自動車がなかったので、その範囲は狭かった。まず、猪のアシカタ（足跡）を熟練者が見て、いつのものを判断する。「中素人は玄人に見てもらえ」という。雨降りの前後、木のしずくの有無、露天と山中などの条件によってアシカタは違って来る。天気が良くて地面が乾いていると見にくい。狩りには雨や雪の降った日の翌日が良く、特に降雪の翌日はアシカタが明確なので犬は不要だといった。アシカタの大きさで重さがわかるし、個体の識別もできる。石原を良く走る猪は丸爪になり、そうでなければ長爪となるからである。前夜に猪が通ったことを確認して、狩りをする山を決める。地形や猪の推定所在地によって、猟場の範囲は大きく変化する。猪はゴンスケとも呼ばれる。カルマともいう。

- c. ねぐらを出産時と大雪の前に作る。茅・笹・芽立ちの木を喰い切って屋根状に覆う。泥浴び場をニタといい、雨が降った時にだけ泥地になる所をカラニタという。谷の古田やジルイ（湿った）粘土質土壌の所に作る。ニタで泥をつけて松の木にこすりつける。猪は逃げやすい山の八合目あたりで寝る。臭覚敏感な猪は人や犬の存在を嗅ぎ分けるという。勢子は犬を連れて歩いて猪を追い出す。7～10歳ほどの老練な猟犬が猪を嗅ぎ出す。猪の匂いについて犬が追いかけることを「トにつく」といって犬はト鳴きする。小さな猪はすぐに逃げるが、大きな猪は藪の中に潜む。その時は、犬は猪が移動しないように囲んで吠える。勢子は静かに風下から近寄って鉄砲で撃つ。犬が猪を見つけて吠えることをタテルといい、逃げる猪を追いかけて吠えることを追い鳴きといった。追いかけられた猪はウジを通して逃げる。勢子は「誰々の所に向かったぞ」とオラン（叫ん）で矢待ちの猟師に知らせた。現在はトランシーバーで連絡する。最初に獲物に弾を撃ち込んだ人を一番矢という。
- d. ハンヤ（半矢）といって、猪が手傷を負って暴れている時には、猟師が後ろから近寄り、後脚をつかまえてひっくり返し、ヤガラシという短刀で脇の下から心臓を刺して殺す。
- e. 猟銃は散弾銃で、猪用はサンタン弾（一発入り）、その他の獲物には六～九発の鉛弾の入ったシシバラという散弾を用いる。少数の猟師はライフルを用いる。猪を撃ちとめたら、散弾の真鍮製の葉莖を笛の代わりに吹いて合図した。どのように撃ったかを熟練者が実地検分し、矢切りを初心者に教えた。矢切りとは銃弾の飛跡のことで、木や竹についた弾痕で判断する。

### 3) 鹿猟 [シシブエ・シカブエ] (九重町)

- a. シシブエ（鹿笛）猟：鹿の交尾期に見通しの良い所に隠れ、鹿笛を吹いて雄をおびき寄せて銃で撃つ。鹿笛を雄の鹿の声と間違える。
- b. 朝追い猟：夜行性の鹿は、夜になると尾根に出て遠方まで餌を食べに行き、夜明けにねぐらの藪に戻る。夜明けに尾根で大声で叫んだり、缶をたたくと、藪に戻ろうとした鹿が、驚いて、コシ（越し＝山越えの獣道）に向かって走り下るので、猟師はコシで待ち伏せして朝霧の中から飛び出す鹿を銃で撃つ。
- c. 巻狩り：「廻し鹿狩り」ともいう。まず「見切り」といって、一山の周囲を巡って、アト（跡＝足跡や糞などの生活痕）を



鹿笛と雉子笛 (九重町)

調べ、その山に鹿がいるかを確かめてから、10人ほどの猟師が集まって相談する。

猟師の大多数は「シガキ」といって、各所のウジ（獣道）に待ち伏せし、1～2頭の犬を連れて犬屋（親父ともいう）が山に入って鹿を追い立て、ウジを逃げてきた鹿を、シガキの猟師が銃で撃ち止める。

## （2）猪の解体と分配（津久見市八戸の場合）

### ① 解体場所

- 1) 撃ち留めた場所
- 2) 村落付近の特定の場所＝津久見市八戸の山神社（集落の下）前の岩の上

### ② 解体法

- 1) 解体用具：ヤマカラチ（8寸幅の小刀）
- 2) 食用となるワタ（内臓）：マル（心臓）・クロフグ（肝臓）・オオブクロ（胃）・肺
- 3) ワタを出し、伏せて血を出し、耳の後ろから絶ち割って首を落とし、背中を割る。
- 4) 山の神にマルを奉納＝心臓の先を切り取り、六弁の花のように切り開き、竹串に挿して奉納。
- 5) 女性はマルを食べてはいけないとされている。

### ③ 分配法

- 1) 猪の頭とオオホネ（背骨）周辺は一番矢の人の取り分。
- 2) シカタ（肋骨の付け根）は獲物を担いで帰った人の取り分。
- 3) 他の者はアバラ肉と脚の肉を分配する。一人分の分け前を一株という。
- 4) 鉄砲株は1株。勢子は犬の分を加えて2株。
- 5) 犬たちには脚の骨と一株分の肉を与えた。
- 6) 解体分配後、撃ち取った人が骨入れといって煮炊き役となり、シシ雑炊にして酒を飲みながら皆で食べる。

## （3）利用法

- 1) 猪の前の足先を門口に打ち付けて魔除けにした。猪が土を掻き込むように幸せを掻き込むのだという。
- 2) 猪の後頭部に生えている長いウノ毛を皮ごと剥いで、門守りにした。
- 3) 猪の鼻を乾燥させて保存。鋸で挽いて粉にして米粒と練り合わせて棘の吸い出しにした。
- 4) シシ肉を打ち身に貼って冷やしたり、食べると痛みが軽くなった。（九重町）
- 5) シシ肉はシシ雑炊かシシ鍋にして食べた。
- 6) 鹿肉は鹿鍋にして食べたが、新鮮な肉は刺身にして食べたという。

#### (4) シシ権現 (臼杵市野津町)

- 1) 臼杵市野津町西河野にあり、「白鹿権現」ともいう。谷底近くに鎮座する熊野神社の傍らの崖を鉄鎖を用いてよじ登る。崖の途中の小さなテラスに室町期の石塔がある。その奥に洞窟があり、洞窟の奥にシシ権現の小さな石祠があり、床面には猪の下顎骨や頭骨がうずたかく積み上げられている。
- 2) 猟師たちは正月元旦にシシ権現にお参りし、前年に獲った一番大きな猪の下顎骨と御神酒を奉納する。弾帯と実砲をこめた銃を神前に供える。この銃弾で撃つと、良く当たると信じられている。そして、別の弾で試射する。シシ権現は女人禁制の地。
- 3) この下顎骨などは、供養と共に山の獲物としての猪が再生することを祈って奉納すると推測される。

#### (5) 千匹塚

猟師が多数の獣の命を絶ったことに対する悔過の意味をこめ、その獣たちの供養のために建立した石碑。大分県内に最も多く分布し、佐賀県の背振山系など九州各地にも見られる。

所在地	建立時期	碑文
1. 九重町筋湯	寛政12年 (1800)	供養狼猪鹿千五百疋 新兵衛
2. 由布市湯布院町山石原	文化7年 (1810)	断命猪鹿諸獸凡千九百八十四頭右為御悔過造立之者也 六十四才 次郎右衛門
3. 国東市国東町大恩寺	文政5年 (1822)	猪供養塔 当邑石川忠太郎
4. 日田市小野市木	文政13年 (1842)	猪鹿供養塔 千六百余 市井木要助 八十二才
5. 日田市小野市木	時期未詳	猪鹿供養塔 千二百疋余 権藤利九右衛門
6. 国東市国東町下成仏	天保15年 (1844)	鳥類畜類殺生一切供養塔
7. 日田市上津江町小川原	天保 (1830-44) ?	津江久作
8. 日田市前津江町出野	天保 (1830-44) ?	
9. 豊後高田市香々地町三角	弘化2年 (1845)	禽獸供養塔 施主 舛田増右衛門 (施恩寺)
10. 国東市国見町赤根	慶応3年 (1867)	禽獸供養塔 發起村長後藤儀助 (阿弥陀寺)
11. 日田市小野市木	明治15年 (1882)	猪鹿千疋供養塔 権藤藤左衛門…
12. 佐伯市宇目町上津小野	明治36年 (1903)	猪鹿千之供養塔 小野仲吉
13. 竹田市神原	大正7年 (1918)	猪鹿万霊之碑 (33名連記)
14. 佐伯市宇目町藤河内	時期未詳	
15. 佐伯市本匠町因尾	時期未詳	